

とやかくとすれどもたへぬ物おもひ、かすみこまかに引まはしけり、うつくしなた、丸貌のほ、ほまゆ。馬にのりたる人丸をみよ

〔大上薦御名之事〕一ぼうまゆのほど、ほんまゆのけを、またばかりとるなり、

〔安齋隨筆 十二〕拔眉齒黒 堤中納言物語むしめづる姫君の卷に云、人はすべてつくろう處あるはわろしとて、まゆさらにぬき給はず、はぐろめさらにうるさし、きたなしとてつけ給はず、いとしろらかにゑみつ、このむしどもをあしたゆふべにあいし給ふ云々、是にて考るに、眉毛ぬき、齒をくろむる事は、久しき世よりあり來たれる事也、

〔貞丈雜記 人物 二〕一女眉凶事の時拭事、大永六年五月二水記云、後柏原院崩御條、眉之事崩御の後、親王御方令揮事、此事先例如何、明應之度事、女中皆失念云々、今度先被拭、親王渡御之日有御眉、渡御倚廬之後、又被拭之、還御本殿之時同之、諒闇中無御眉云々、女中眉終不拭之、崩御之後皆以淡黛也、若殿上人同之云々、按男女共に崩御の時は、眉を落す事と見ゆ、今世女は凶事の時は、眉にしんを入れずと云ふも、是より出でし事なるべし、室町家にも公家の故實を用ひられ給ひし故、舊記に凶事の時、女の眉落す事見えざれ共、左も有るべき故實也、眉にしんを入れずと云ふ事は、舊記に見及ばず、

〔貞丈雜記 人物 一〕横眉も、眉の事、光源院殿〇足利義輝御元服記云、御髮亂サル、御眉ハモ、マユ也、

御烏帽子召サレテ横眉也云々、横眉ハ俗ニ是ヲ天井眉と云ふ、頭こく末うすく句はせたり、あまり目の方へ出過ぎたるもあし、又あまり引き入れて、髪の中へ入れたるも悪し、も、眉と云ふは、詳に知れざれ共考へて記すも、まゆはハツク茫々眉と云ふ事をもふ、眉と唱へて、それをも、眉と云ひ違へたるにや、併し茫々眉は、自身の眉毛の中へ、細くすみにて心をさし入る事なり、額に別に作るに非ず、又按ずるにも、眉は桃の實の様に二つ額に置く事歟、